

AI と丸腰のはざまで



高 田 主 岳

時代の大きなうねりの中を生きているのを実感する。パンデミックを経験すると露にも思わずにいたが、全世界がその恐怖を味わった。医療従事者の方々の献身的な貢献により、その渦中を潜り抜け、表面上はそれ以前と同様の生活を送れるようにはなったが、予想すらしなかったことが起こることを目の当たりにして、いかに日常が尊いかを認識することとなった。普通に研究できることは普遍ではなく、それを享受できることに感謝しながら過ごす今日この頃である。

幼少の頃にはSFの世界のことであった生成AIの台頭も、時代の大きな変化を感じざるを得ない。文章生成AIは莫大なデータを学習して、ある単語の次になる確率が高い単語を選んで文章を作っているが、最近はかなりまともな文章を吐き出す。研究や業務に使われることが多くなってきたのもうなずける。しかし、文章を作成する能力を身につけた人が、補助として使うことは効率化を進め、多くの利点をもたらすが、初学者が使うことには疑問を感じる。自分で考える力を身に付けずに初めから生成AIを使っても、指示がまともであれば内容的にも文章的にもそれらしいものができてしまう。最近では生成AIを使いこなすための講義も出て来ており、これは生成AIの使用を推奨していることを示す。すなわち、過程は重視せず、結果が良ければよいとする考え方である。しかし、できたものは一体誰が作成したものなのだろう。ツールを持たずに何かを生み出さなければいけない場合に、生成AIに頼っている人は丸腰で戦えるのであろうか。

丸腰で臨まなくてはならず、しかも周りは専門家だらけという最たる場は学会発表であろう。特に質疑応答ではその場で回答を求められるために、能力やそれまでに積み重ねてきたものが顕（あらわ）となる。ツールに頼り、知見を蓄えてこなかった人にはなかなか厳しい環境となる。これまで学会は、学術分野を發展させ、研究者間の情報交換・知見を共有する場として位置付けられていたが、加えて発表の場の提供自体が大きな意義を持つようになってきている。本会は会員数も多く、討論会と年会という年に2回の大きな大会に加えて、各支部主催の小規模な学会や研究会を多く開催しており、若い研究者に多くの発表の機会を与えている。このことは図らずとも最近では大きな意味をもってきており、学会および支部活動の将来像を描く際に、深く考慮すべきものと考えている。

中部支部では若手交流会（高山フォーラム）と夏期セミナーを催している。前者は主に研究室に配属された学部生の参加が多く、初めての学会での発表の場として機能している。後者は修士課程の学生向けであり、より進んだレベルでの発表の場となっている。両者を合わせる議論が進んだこともあったが、上記の棲み分けがなされており、それぞれが十分な存在意義を持つものと認識され、今日まで連綿と維持されてきている。変化の速度が加速度的に増している現代において、その方向を見極めて進んでいくために必要なものは人間の思考である。知的活動が継続する方向性を見極めながら、進んで行きたい。

〔TAKADA Kazutake, 名古屋工業大学, 中部支部支部長〕